

佳作

音楽に真っ直ぐに

福井県 福井県立藤島高等学校二年 竹内 梓紗

念願の舞台である北陸大会への出場をかけた県大会。「プログラム六番!!」

ホールに歓声が響いた。

私は中高と吹奏楽部に所属している。担当しているのはカタツムリみたいな形の楽器、ホルンだ。他の華形楽器に比べると知名度が低くぼかんとされることが多いが、今ではホルンを吹けて本当に良かったと思っている。鯖江中学校三年時の夏のコンクールで、顧問が選んでくれたのは、八木澤教司やぎさわ けいじさん作曲の『マチュピチュ』という曲だ。空中都市の神秘的な空気感にどんどん引き込まれていった。顧問はベテランの先生で、厳しく指導して下さった。ジョークを多発し、合奏中に微妙な空気になることもあった。私はそんな先生が大好きだった。少し猫背で細身の先生だけど、全身で表現する指揮はいつだって私を曲の世界に連れていってくれた。引退する時、このまま吹部生活を終わってしまうのはもったいない気がした。まだ音楽の感動を忘れたくない。先生に与えてもらった全てを次の出会いにもっていききたい。そう思った。

あってそれらを共有することに喜びを感じる。そうやってどんな景色が広がっていく。私達はそれを吹奏楽という形で表現する。そうして、それはまた誰かに届く。本当に、音楽って人と人とのつながりだ。例えば、私達藤吹はかつての飛行家としての英雄で、歴史に埋もれてしまったサントスさんに思いを馳せた。まるで古典を読んでいるかのように。音楽は時代を越える。また、私が今最高の仲間と吹奏楽を楽しめているのも、中学の顧問と藤吹との出会いがあったからだ。音楽がつなげてくれた人達が大好きだ。音楽が大好きだ。

本番目前。私は福井鉄道で通学していて、途中にハーモニホールが見える。県大会の舞台であり、吹部仲間と視界からなくなるまで見つめては、青春だね、なんて言っていて笑った。そして迎えた本番当日。舞台袖で課題曲のテンポを確認し、緊張と高揚の混ざった目と目を合わせて鼓舞し合った。足裏に感覚を全集中させ、ステージへの一步を踏みしめる。シャンデリアがキラキラと輝いている。指揮者とアイコンタクトをとり、全員構える。心はひとつ。私達の夏をかけた十二分間が始まった。本番は体感三秒。あっという間だった。これが最後だったのかもしれない切なさ、皆が口々に「楽しかった」と言うのを聞いた安堵感が押し寄せ、涙がこぼれた。それから楽器を片付けて、結果発表。

「来たる北陸大会に出場する四つの団体は——」
両隣りの部員と共に、手を握りしめる。

一昨年三月、藤島高校吹奏楽部、通称「藤吹」の定期演奏会に足を運んだ。父の桜マラソンの応援に行った帰りだった。ブー……会場が暗くなる。幕開けの曲は『マードックからの最後の手紙』。私が人生に一度は演奏したいと思っている曲だ。これを聞きたくて見に行ったら言ってもいい。そして、ぱっと明るくなったステージに指揮者が現れた。なんとそれは生徒だった。私にとって新鮮に感じられた。低音の重厚なサウンドが響く。何十回もユーチューブで聞いていた曲が、今、ホールの空気を震わせて私に届いてくる。指揮者と演奏者が一体となり、全体が波のようにうねる。これを生徒で作りに上げたんだ。吹奏楽っていいなあ。私は藤吹に入ると決めた。そんな私の吹奏楽ライブは順調に進み、高校二年生の夏、私の藤吹としての最後のコンクールがやってきた。去年は北陸大会進出が叶わず、リベンジに燃えていた。吹奏楽コンクールでは事前に発表された課題曲と各校が選ぶ自由曲の二曲を演奏する。練習時間の少なさに焦ってもめながらも、話し合いと全体投票で決まった自由曲が、樽屋雅徳たるやまのりさん作曲の『サントス・デュモン』の大空への夢』だ。サントスさんの空への憧れ、飛行機開発における苦難、周囲からの賞讃、そして葛藤。様々な感情が行き交うこの曲を、もっと理解したいと思った。音楽っておもしろい。言葉を通さなくとも、作者が書き下ろした楽譜の向こう側の世界が見えてくる。他のメンバーと曲のイメージについて話し合う時、それぞれの解釈が

「プログラム一番!! 二番!! 六番——」。

四番は、藤吹は呼ばれなかった。リベンジを果たせなかった。悔しかった。だけど、気分は驚くほどさっぱりとしていた。そしてそれは私だけではなかったようだった。結果より過程が大事だということを、人生で一番実感できた。吹部一色の毎日、体力的に大変な時もあった。だが、過去の出会いに背中を押してもらったこと、人生において大切なメンバーに沢山出会えたこと、私に吹奏楽を頑張らせてくれたことなど、周りの人達への感謝が数え切れないほど浮かんでくる。心から本気になることって幸せなんだ。

吹奏楽。真っ直ぐに大好きと言えるもの。音楽がつなげてくれた感動をこれからも感じていたいし、大切な人と共有していきたい。